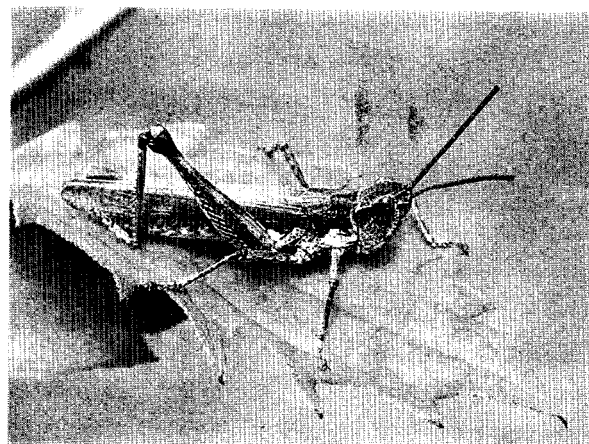
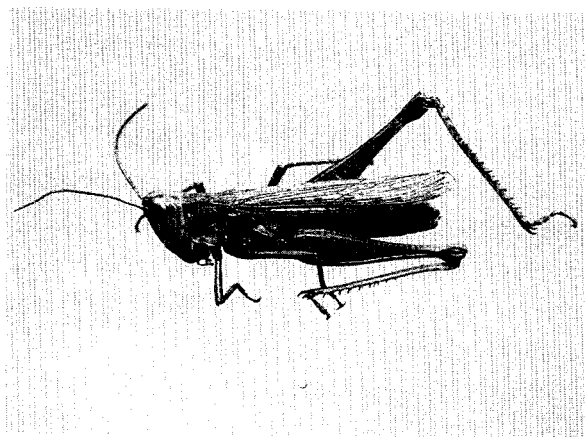


## 伊那谷でのヒメヒゲナガヒナバッタの 採集記録

小林 正明

ヒメヒゲナガヒナバッタ *Schmidtiacris schmidti* (Ikonnikov, 1913) は古川晴雄博士によって中房温泉から記載されて以来長くその存在が確認されなかった。筆者も中房温泉に3回探索に行ったが、採集できなかった。その後古川の発表は上記種のシノニムとされた。近年になっていくつかの場所から採集された(2001年, 山形県など)。伊那谷では東京の和田一郎氏が長谷村の黒川沿いで記録した(1997年9月27日, 5♂2♀, 入笠山側ゲートから13km地点, 標高1,100m)(1998年9月6日, 数exs. 同地)。

私は和田氏に場所を教わり、2002年9月10日、成虫を採集した。



8♂6♀, 上伊那郡長谷村黒川(標高1,100m), 2002年9月10日, 小林正明採集。

同地は戸台から入笠山に抜ける林道で、川沿いにある開けた草原であった。戸台と旧営林署の宿舎の中間地点で、標高1,100mの所である。大きな堰堤(おそ

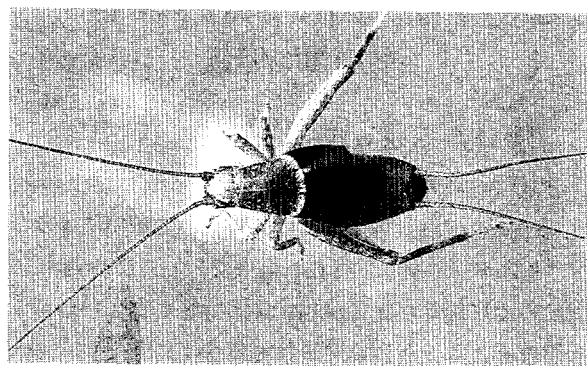
らく黒川では一番大きな堰堤)の上で、林道から川に向かって道があり、川付近の道路沿いに比較的多かった。黒川沿いにはその場所からしか記録できなかった。戸台から入笠山まではおよそ16kmほどの距離があるが、今回の記録地以外はバッタ類の全くいない場所や、いてもヒロバネヒナバッタだけであった。またヒメヒゲナガヒナバッタの記録された場所にはヒロバネヒナバッタはいなかった。

(こばやし まさあき/〒395-0001 飯田市座光寺宮崎2155)

## 飯田市でカネタタキを記録

小林 正明

2002年8月14日、自然友の会の秋の虫観察会が追手町の美博周辺で行われた。そのとき、美博正門前の庭にあるエドヒガンの根本のヤマブキの植え込みの中から、木下進氏がカネタタキ *Ornebius kanetataki* (Matsumura, 1904) 1雄を採集した。長野県でのカネタタキの記録は大変に少ないので報告しておく。



1♂, 飯田市追手町飯田市美術博物館(標高500m), 2002年8月14日, 木下 進採集。

3♂発音を聴く, 同地, 同日, 小林正明確認。

3♂発音を聴く, 飯田市桜町(520m), 同日, 小林正明確認。

3♂4♀1幼虫, 飯田市追手町飯田市美術博物館, 2002年8月15日, 小林正明採集。

従来の記録は1978年10月16日、天龍村伊那小沢で筆者が記録した2雄の声を聞いたことと、1雄を採集したのみであった。また「遠山郷に生きる動物たち」(1998年南信濃村教育委員会発行)には村内にカネタタキが生息していることが記録されている。そこには「村内には多いものではありません」と記載されてい

る。

観察会当日、終わった後に周辺を注意してみると、美博の市道に面したシラカシの生け垣の中からも3~4個体の鳴き声を聴いた。また同じ日にJR桜町駅下のナビテック株式会社(旧JA飯田)のツゲの生け垣から2個体の発音、桜町駅上の人家生け垣から1個体の発音を聴いた。カネタタキの声は注意深く意識して聴こうとすると聴こえてくるものであった。さらに翌9月15日、飯田市美術博物館前の最初のヤマブキの中から3雄、4雌、1雌幼虫を採集した。

筆者が長野県で最初にカネタタキを記録した伊那小沢の標高は270mであった。カネタタキは静岡県では普通種であるが、長野県にはいないと思こんでいた。伊那小沢で採集したときも、たまたま鳴き声を聴いて採集したもので、他にはいるように思わなかった。そのため長野県内で探そうという気持ちはまったくなかった。とても飯田市までは分布していないと思っていたので、今回の記録はかなり驚いた。今回の記録の個体数の多さからすると、何らかの原因でカネタタキが分布を広げたのではなく、今まで気づけなかったためと思われた。

美博の標高は500mで、桜町の標高は520mである。それぞれの場所からこれだけの個体が記録されたことは、伊那谷でもかなり北まで分布していることが考えられる。

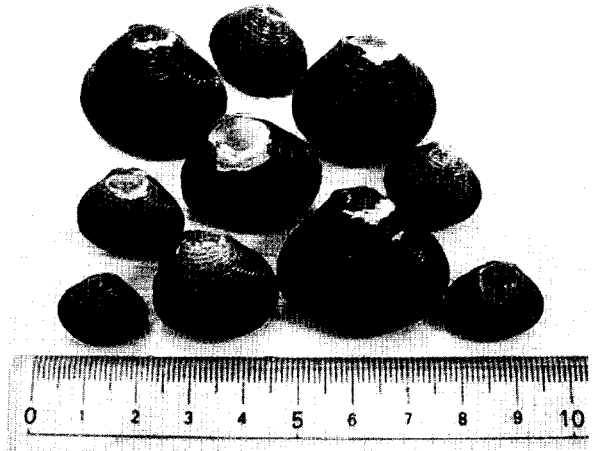
(こばやし まさあき/〒395-0001 飯田市座光寺宮崎2155)

貝 類

飯田市丸山町の王竜寺川で  
マシジミの生息再確認

澤島 拓夫

飯田市丸山町かざこし子どもの森公園の近くを流れる王竜寺川で、1961年の「三六災害」以降の河川改修や家庭廃水による水質汚染のために絶滅したと考えられていたマシジミが、現在も生き残っていることが、1997年6月15日、かざこし子どもの森公園の「森森探検隊」の調査で確認された。



その後の調査で、①マシジミはおしぼら池の付近の湧水が流れる側溝に設けられた柵状構造に貯まった砂礫中に多数生残していること、②それより下流にしかマシジミは分布しないこと、③王竜寺川付近の農業用水にも分布していることがわかった。マシジミは単為生殖を行なうため、環境条件が整っていれば、1個体でも子孫が残すことが可能である。王竜寺川のマシジミの再発見は、下水道の整備による水質の改善と、施工後の年月の経過により、マシジミの生息に適した環境が川に蘇りつつあることを示唆するものである。

最後に、マシジミが生残している可能性を示唆して頂いた細澤彰雄氏、シジミの調査を協力して頂いた羽場睦美氏、その他森森探検隊の参加者に感謝の意を表す。

(さわはた たくお/〒395-0244 長野県飯田市  
山本5992-1 野外教育研究財団)